

企業退職者の生きがいとなった「かながわ子ども教室」



NPO法人 かながわ子ども教室 理事長 勝浦 嗣夫

1. かながわ子ども教室のあゆみ

1) 発足前史

「かながわ子ども教室」の活動を開始してから15年が経っています。かながわ子ども教室は、1997年に発足した神奈川県在住の三菱系企業OBによる「ダイヤかながわ交流会」を母体に、2004年に新たなボランティア活動として「実務の経験豊かな企業退職者の我々が講師となり、物理や化学の原理を実務経験の話の中に忍ばせて、子どもたちに理科好きになってもらおう。子どもの科学教室を開設し我が国の未来のため微力ながら尽力したい」という理念のもとにスタートしました。

2) スタート時の苦労

2004年8月、第一回子どもの科学教室を開催することになりました。場所は横浜の「三菱みなとみらい技術館」でした。最大の問題は子どもたちをどのようにして集めるかでした。暑い夏、手分けして横浜市内各所に3,000枚の案内チラシを配りましたが、知名度ゼロのため応募はわずか3人。こんなに頑張って立ち上げた教室なのにどうして反応がないのだ、なぜ?と愕然としました。身の程知らずでした。最終的に肝心の子ども集めは、会員の中で自治会役員という顔を利かせて地域の子どもの大勢連れて来ることで、最初の海洋教室の開催ができました。まさに薄氷のスタートでした。その後、子どもたちのいる場所に出掛けて行く「出前教室」に切り替え、生徒集めの苦労からは逃れることができました。

2009年4月からは「NPO法人かながわ子ども教室」として法人化しました。「理科好きの子どもの育成」「子どもの健全な人格形成」を目的に、「たのしい科学教室」(以下、科学教室)と「たのしい暮らしの教室」(以下、暮らしの教室)を開催しています。

3) グラフで見るこれまでの活動

補助金・助成金による財政基盤の確立、教科の充実、会員の確保、NPO化など先輩諸氏のご尽力のお陰で、15年

間活動を続けることができています。これまでの経緯をグラフで示します。

まずは、教室開催数と参加生徒数は図1、2に示すとおりで、初年度4件だった開催数も、5年目の2008年には100件を超え、2009年以降は年間150件前後で推移しています。参加した生徒の数も、教室に限っても初年度の146人から2006年には2,000人近くに達し、2007年以降は3,000～4,000人の水準を維持しています。

一方、会員の変遷を見ると、会員数(図3)は、準備段階の2003年に15名でスタートし(2004年教室開始時は20名)、NPO化した2009年には43名と3倍近くまで増え、2012年には50名を超えましたが、その後は退会者が入会者を上回り、現時点では42名となっています。現会員のうち7名はスタート時からの会員です。会員の平均年齢(図3)は、スタート時の67歳から76歳と15年間で9歳上昇しています。65歳までの雇用延長が定着した昨今では、入会時の年齢が70歳前後となり、会員の高齢化は避けられませんが、スタート時は三菱系企業のOBのみでしたが、現在は三菱系以外出身の会員も8名にまで増えています。

2. 子ども教室の活動

神奈川県内の小学校(正規授業・理科クラブ)、地区センター、学童保育、放課後児童施設、児童相談所などで、小学生を対象に活動を行っています。活動内容は、実験や工作を通して科学への理解や関心を深めてもらう「科学教室」と、社会の仕組みを知ってもらい健全な人格形成を目指した「暮らしの教室」があります。現時点では、「科学教室」が糸電話、宇宙、液晶、エネルギー、海洋、気象、空気、子どもの化学、地球、電気、天体観測、動画、ひかりと色、プラスチック、まわれ!浮沈子、ロボットの16テーマ、「暮らしの教室」がお金、世界、日本の行事・お祭り、私たちと水の4テーマを開催しています。講義はパソコンとプロジェクターを持参し、パワーポイントで作成したスライドを使用しています。

会員は3つの役割をそれぞれの能力（主として身体的・時間的）に応じて、分担します。

- ① 開催会場との調整を行う「地区担当」
- ② 教室内容を準備・講義を担当する「講師担当」
- ③ 教室実施時にグループ単位で行う実験・工作などを支援・指導する「サポーター担当」

全員がメールを活用して、日々の連絡調整を効率的に行っています。さらに、毎月一回全員が参加する「実行委員会」で、サポーターの最終調整や必要な情報交換をして、スムーズな運営を心がけています。教室の終了後には、先方の担当者を交えて反省会を開催し、問題点・改善点など辛口のご意見をいただき、より良い教室ができるよう努力しています。

3.課題と展望

会員の増強が最優先の課題です。企業退職者が会員の大半を占めていますが、定年延長、各社のOB会組織の弱体化などで、若い（と言っても、60歳代）新人の発掘に苦勞しています。昨年から会員募集のためのパンフレットを作ったり、各社OB会組織でのPR活動に努めています。2019年4月に日経新聞に我々の活動が取り上げられ、それを読んで入会に繋がったケースもあり、今年度は4名の新人を迎えることができました。

2つ目の課題は、教科の新設です。新しい教科を立ち上げるには、多大なエネルギーが必要ですが、完成した時の充実感は何物にも変えがたいものです。組織の活力維持にも大切なことです。既存の教科の見直し・改善も絶えず行う必要があります。



子ども教室の風景

発足時に苦勞した会場探しは、毎年定期的で開催する会場が確保され、口コミでの新たな開催依頼もあることから、最近では、我々の開催能力を超え、一部お断りしている状況になっています。この面からも会員の増強が必要になっています。

財政面もダイヤ財団からの助成など安定的な助成を得ることができ、今のところ日々の運営には問題のない状況にあり、助成元にはとても感謝しています。

最後に、私自身にとっても、70歳を過ぎて仲間たちと一緒に、「きょういく」「きょうよう」に事欠かず、子どもたちからの刺激や感謝を受け充実した日々を送ることができるのは「かながわ子ども教室」のお陰と感じています。もし、子ども教室の存在を知らなかったら、どんな毎日を過ごしていただろうと想像すると空恐ろしくなります。体調管理に心掛けて1日でも長くこの活動に参加できるようにしたいと願っています。

